

感染症発生動向調査委員会報告 11月

《今月のトピックス》

- マイコプラズマ肺炎の報告が増加しています。
- インフルエンザが報告されはじめています。今後の動向に注意が必要です。
- 感染性胃腸炎が漸増しており、今後の注意が必要です。

全数把握疾患

＜腸管出血性大腸菌感染症＞

1件の報告がありました(O157 VT1VT2)。感染経路等不明です。

◆啓発用チラシ「O157に注意しましょう」<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf>

◆家庭でできる食中毒予防のポイント(動画)<http://www.youtube.com/watch?v=TI03jn2E1bU>

＜レジオネラ症＞

3件の肺炎型の報告がありました。感染経路等調査中です。

＜アメーバ赤痢＞

2件の腸管アメーバ症の報告がありました。1件は国内での経口感染が推定され、もう1件は感染経路感染地域等不明です。

＜劇症型溶血性レンサ球菌感染症＞

1件のA群溶連菌による報告がありました。50代男性で、咳等の感冒様症状に引き続き、左胸背部痛、発熱で発症しました。本症は突然の発病と、発病から病状の進行が非常に急激なことが知られています。国立感染症研究所のホームページによると、最も一般的な初期症状は疼痛で、続いて圧痛あるいは全身症状が見られます。疼痛の開始前に、発熱、悪寒、筋肉痛、下痢のようなインフルエンザ様の症状が20%の患者にみられ、全身症状としては、発熱が最も一般的ですが、患者の10%はショックによる低体温を示します。抗菌薬としてはペニシリン系薬が第一選択薬です。また、組織内の菌密度が上昇すると菌の発育が抑制され、βラクタム系薬の効果が低下する現象が知られており、極端な敗血症病態では、細胞内移行性の高いクリンダマイシンを推奨する意見もあります。

◆国立感染症研究所:劇症型溶血性レンサ球菌感染症 http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02_g2/k02_46/k02_46.html

＜バンコマイシン耐性腸球菌感染症＞

1件の報告がありました。遺伝子型は現在検査中です。感染経路感染地域等不明です。臨床上問題にされ、院内感染対策の対象となっているのはvanAまたはvanB遺伝子を保有する腸球菌です。一方、vanC型は今のところ、欧米でも重篤な感染症を引き起こしたとの報告は稀であり、また、健常者でも入念に検査した場合少なくとも数%から分離されると言われており、「常在菌」的性格も強く、院内感染対策の対象にはなっていません。しかし、感染症法では、vanC型による重症感染症の発生状況を正確に把握するため、血液や髄液など通常無菌的であるべき臨床材料からvanC型が分離された場合には報告対象に含めています。

◆国立感染症研究所:バンコマイシン耐性腸球菌感染症 http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02_g1/k02_16/k02_16.html

<麻しん>

ワクチン接種歴2回の児童で、修飾麻しんの報告が1件ありました。血清IgM2.07で、発疹を認めたため診断となりましたが、現在PCR検査で確認中です。

- ◆国立感染症研究所:麻しんの検査診断アルゴリズム <http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/pdf01/arugorizumu.pdf>
- ◆国立感染症研究所:麻しん届出ガイドライン http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/guideline/doctor_ver3.pdf

定点把握疾患

平成23年10月17日から11月20日まで(平成23年第42週から第46週まで。ただし、性感染症については平成23年10月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成23年 週一月日対照表

第42週	10月17日～23日
第43週	10月24日～30日
第44週	10月31日～11月 6日
第45週	11月 7日～13日
第46週	11月14日～20日

1 患者定点からの情報

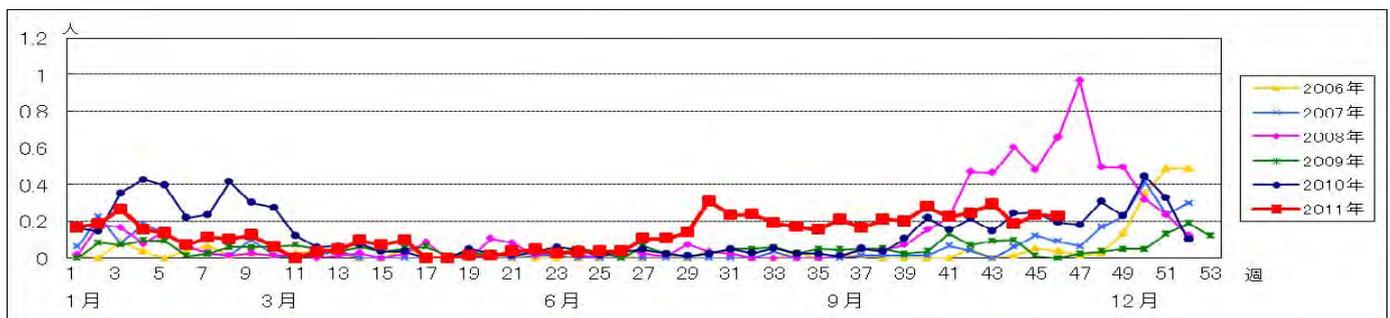
市内の患者定点は、小児科定点:92か所、内科定点:60か所、眼科定点:19か所、性感染症定点:27か所、基幹(病院)定点:3か所の計201か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の11感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計152定点から報告されます。

<インフルエンザ>

第43週に定点あたり0.08、44週0.16、45週0.12、46週0.08と、少しずつ報告がみられています。迅速キットの結果は8割ほどがA型で、残りはB型です。ポストパンデミックに入った2010/11シーズンはAH1N1pdm09、AH3亜型、B型ウイルスの混合流行であり、この夏の南半球(夏季)でも3種類のウイルスが混在しています。南半球の流行状況はその後の北半球での流行状況の参考となることから、国内でも今シーズンも多様なウイルスの流行が予想されています。

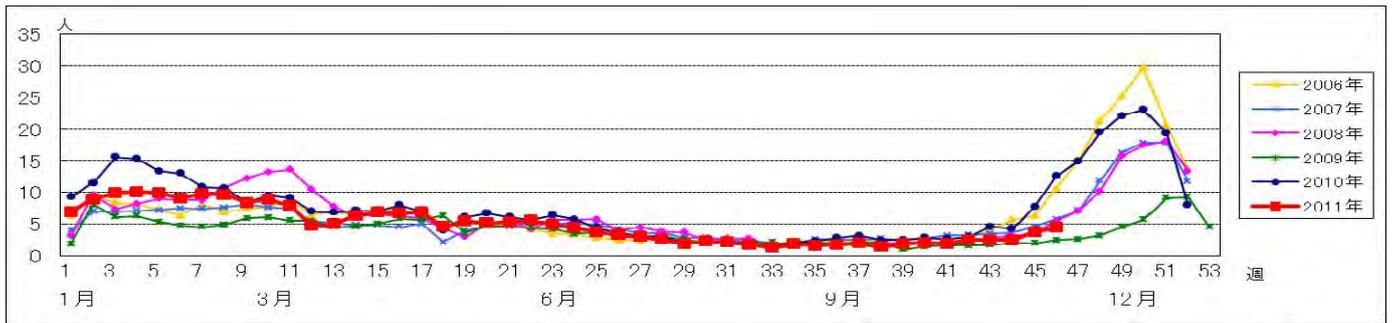
<RSウイルス感染症>

今年は全国的に流行の立ち上がりが見られました。横浜市でも、例年より早い30週あたりから定点あたり0.20を超えましたが、その後はほぼ横ばいが続いています。例年冬にかけて流行するため、今後の注意が必要です。



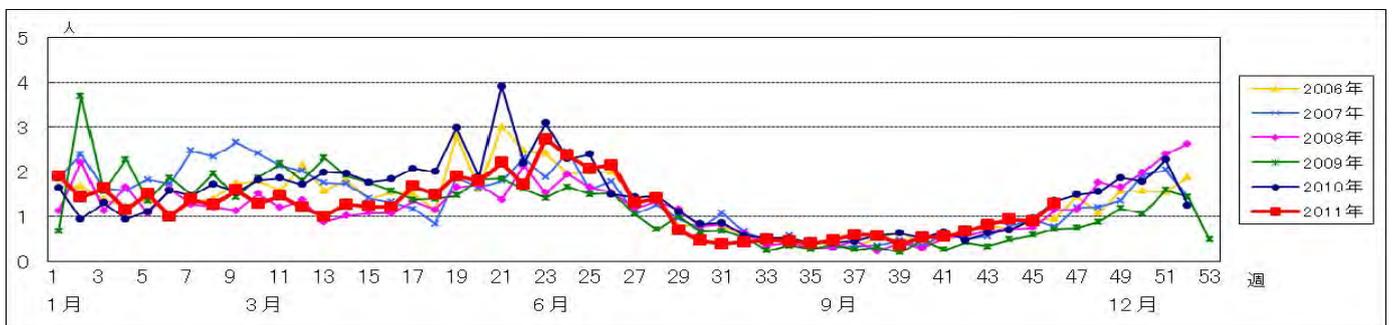
<感染性胃腸炎>

市内全体では現在のところ落ち着いていますが、44週 2.38、45週 3.71、46週 4.32と漸増しています。区別では46週で泉区 9.67、南区 8.33、神奈川区 7.17、鶴見区 7.00と増加がみられており、今後の流行期に向けて注意が必要です。



<水痘>

市内全体では現在のところ落ち着いていますが、44週0.93、45週0.89、46週1.29と、少しずつ上昇しています。今後の注意が必要です。



<手足口病>

横浜市内の流行も落ち着き、第46週では警報レベルは瀬谷区2.00のみとなりました。

<性感染症>

10月では、性器クラミジア感染症は男性が19件、女性が16件でした。性器ヘルペス感染症は男性が2件、女性が8件です。尖圭コンジローマは男性8件、女性が1件でした。淋菌感染症は男性が8件、女性が0件でした。

<基幹定点週報>

マイコプラズマ肺炎が全国的に第24週頃から増加傾向にあり、注意が必要です。全国では、例年定点あたり0.2~0.6程度で推移していましたが、44週では1.15と増加しています。横浜市でも増加がみられ、第43週では定点あたり2.00、44週2.00、45週0.00、46週4.00と、昨年の43週0.67、44週0.33、45週0.00、46週0.00を上回っています。他の疾患では、44週に無菌性髄膜炎の報告が1件ありました。細菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告はありませんでした。

<基幹定点月報>

10月は、メチシリン耐性ブドウ球菌感染症5件で、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告はありませんでした。

【 感染症・疫学情報課 】

2 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:9か所、インフルエンザ(内科)定点:3か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所の計16か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は9か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。また、インフルエンザ定点では特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときのみ行っています。

<ウイルス検査>

11月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点43件(鼻咽頭ぬぐい液)、眼科定点3件(眼脂)、基幹定点15件(鼻咽頭ぬぐい液7件、髄液5件、ふん便3件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は上気道炎21人、気管支炎10人、発疹症4人、手足口病3人、咽頭結膜熱2人、耳下腺炎1人、ヘルパンギーナ1人、発熱1人、眼科定点は流行性角結膜炎2人、急性結膜炎1人、基幹定点は髄膜炎2人(5検体)、けいれん2人(4検体)、骨髄炎1人(2検体)、発熱1人(2検体)、発疹症1人(1検体)、胃腸炎1人(1検体)でした。

12月9日現在、小児科定点の上気道炎患者1人からアデノウイルス2型、咽頭結膜熱患者2人、発疹症患者1人、気管支炎患者1人からアデノウイルス(型未同定)、手足口病患者3人と発疹症患者1人からコクサッキーウイルスA16型、ヘルパンギーナ患者から単純ヘルペスウイルス1型、上気道炎患者1人からRSウイルスが分離されています。

これ以外に遺伝子検査では、小児科定点の上気道炎患者1人と気管支炎患者1人からRSウイルス、上気道炎患者1人からエコーウイルス6型の遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

【 検査研究課 ウイルス担当 】

<細菌検査>

11月の感染性胃腸炎関係の受付は小児科定点から2検体、基幹定点から菌株受付が8件、定点以外の医療機関等からは4件あり、腸管病原性大腸菌、腸管出血性大腸菌、腸管毒素原性大腸菌、サルモネラ、カンピロバクター、黄色ブドウ球菌が検出されました。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は小児科定点から11件で、A群溶血性レンサ球菌が7件、肺炎球菌が1件検出されました。基幹定点からはメチシリン耐性黄色ブドウ球菌が1件、定点以外の医療機関等からは12件で、バンコマイシン耐性腸球菌が2件、*Legionella pneumophila*が1件、結核菌が3件でした。

(次ページに表)

表 感染症発生動向調査における病原体検査(11月)

感染性胃腸炎

検査年月 定点の区別 件数	11月			2011年1月～11月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
赤痢菌					3	8
腸管病原性大腸菌		1			8	
腸管出血性大腸菌			1		1	47
腸管毒素原性大腸菌		1			6	
腸管凝集性大腸菌					1	
パラチフス A 菌					3	
サルモネラ			1	2	16	12
カンピロバクター	1			1		3
黄色ブドウ球菌	1			1	1	2
コレラ菌						2
NAG ビブリオ						2
クロストリジウム						1
不検出	0	6	2	7	77	7

その他の感染症

検査年月 定点の区別 件数	11月			2011年1月～11月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
A群溶血性レンサ球菌 T1				7		
T3				4		
T4	1			5		
T12				9		
T25				2		
T28	2			6**		1
T B3264	4			16		
型別不能				2		
B群溶血性レンサ球菌						12
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌		1			7	16
バンコマイシン耐性腸球菌			2			17
<i>Achinomyces</i>						1
<i>Branhamella</i>				1**		
<i>Legionella pneumophila</i>			1			10
インフルエンザ菌				9**		
肺炎球菌	1			6**		
<i>Arcanobacterium haemolyticum</i>					1	
<i>Campylobacter fetus</i>					1	
結核菌			3			3
不検出	3	0	6	17	2	49

*: 定点以外医療機関等(届出疾病の検査依頼)

** : 同一検体から複数菌検出

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【 検査研究課 細菌担当 】